



Title	アラブ文法学における「学派」とマスダル maṣḍar の位置づけ
Author(s)	岡崎, 英樹
Citation	アラブ・イスラム研究. 2008, 6, p. 29-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105881
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

アラブ文法学における「学派」とマスダル maṣḍar の位置づけ

岡崎 英樹*

The Grammatical Schools and the Description of Maṣḍar

One of the most fundamental concepts in early Arabic grammatical theory is that of the Baṣran and Kūfan grammatical schools. Although there is little doubt that this dichotomy has been accepted as historically authentic in the Arab tradition, there is disagreement about the reality of the so-called “schools” since Weil (1913) and, more recently, Carter (1973) called into question the historical validity of the schools.

The aim of this paper is to examine the Baṣran-Kūfan debate from two diverse points of view. The first is that of the statistical approach, i.e., the number of times Baṣra and Kūfa are referenced, gleaned from Ibn Qutayba's *'Adab al-Kātib* and Ibn as-Sarrāḡ's *al-'Uṣūl fī an-Naḥw*, which are two grammatical works from the ninth and tenth centuries, respectively. The data that I collected will complement the statistical data of the other early treatises summarized by Owens (1991) and Bernards (1997). The second viewpoint is diachronic: the evolution of the description of maṣḍar, or a verbal noun, which was observed by comparing the tenth century az-Zaḡḡāḡi's *al-'Īdāḡ fī 'Ilal an-Naḥw* and the twelfth century Ibn al-'Anbārī's *al-'Inṣāf fī Masā'il al-Ḥilāf bayna an-Naḥwiyyīn al-Baṣriyyīn wa al-Kūfiyyīn*.

1. はじめに

アラブ伝統文法学の研究史において、「バスラ」と「クーファ」の両文法学派に関する議論は絶えず主要な位置を占めてきた。とりわけ、両学派が実体のある存在であったのか、それとも、後の文法家らが作り上げた虚構であったのかという議論については、研究者の間でも意見が分かれるところである。

このような議論の前提となる基礎的な資料をより充実させるために、二つの観点からの事実関係を整理するべきであると考え。一つは、8世紀から10世紀にかけての文献に現れる「学派」に関する言及を収集し整理すること。二つ目に、学派間で対立や論争があったとされる文法項目について、初期の文法書での記述がどのように受け継がれていったのかという点を詳細に検討することである。

本稿では、まず、学派の実在性という観点からは、先行研究で必ずしも十分に言及されていない、Ibn Qutayba, *'Adab al-Kātib* と Ibn as-Sarrāḡ, *al-'Uṣūl fī an-Naḥw* の二書に見られる、「バスラ」「クーファ」の両学派についての言及を整理する。さらに、学派間での意見対立があったと伝えられる文法項目のうち、マスダル maṣḍar¹⁾と動

* 四天王寺大学 講師

1) maṣḍar の訳語として「動名詞」「動詞的名詞」「不定詞」などがあり得るだろうが、いずれも、

詞との関係について、10世紀の *az-Zağğāḡī*, *al-ʿĪdāḡ fī ʿIlal an-Naḡw* と12世紀の *Ibn al-ʿAnbārī*, *al-ʿInṣāf fī Masāʾil al-Ḥilāf bayna an-Naḡwiyyīn al-Baṣriyyīn wa al-Kūfiyyīn* の二書を中心に、文法家たちの記述を検証していく。

2. バスラ学派とクーファ学派に関する Weil の説

「バスラ学派」と「クーファ学派」との間に明確な区別を認めるという伝統は、文法書や学習用教科書のみならず、多くの文献で採用されてきた。初期のタバカの書においても、文法家らを地理的、学問的系譜といった観点から分類が行われた。たとえば、*az-Zubaydī* (d. 988) は、地理的観点から「バスラ」「クーファ」「エジプト」「カイラワーン」「アンダルシア」と大きく5地域に分類する²⁾。また、*Ibn an-Nadīm* (d. ca. 1000) は、学問的系譜という観点から、「バスラの文法家」「クーファの文法家」「2つの学派を融合した文法家集団」の3つの区分を設定する³⁾。

バスラ学派とクーファ学派の歴史的現実性の問題については、Weil が *Ibn al-ʿAnbārī*, *ʿInṣāf* の序文において否定的見解を示してからは、多くの議論を経て現在に至っている。彼の主張の要点は、おおよそ次のようなものである。少なくとも9世紀末までは、バスラ学派もクーファ学派も存在しなかった。しかし、10世紀のバグダードで *al-Mubarrad* (d. 898) の弟子たちが活躍する時代になり、標準的かつ正統的な文法を構築する試みの中で、自分たちの意見対立を過去に投影させ、フィクションとしての2つの学派を作り出した。この際に、バスラ学派の理論的背景として掘り所にされたものが、*Sībawayhi* (d. 796) の方法論であった⁴⁾。

Weil の説を概ね受け入れている者に、*Fleisch* や *Carter* らが挙げられる⁵⁾。このような立場を支える根拠のひとつに、8世紀から9世紀までの *Sībawayhi*, *al-Farrāʾ* (d. 822), *al-Mubarrad* の著作の中に、両学派の言及がほとんどみられないが、10世紀の文献でようやく、両学派の意見の対立が頻繁に述べられるようになったという点がある。また、そもそも、*Sībawayhi* と *al-Kisāʾī* (d. 799), *al-Farrāʾ* が対面し論争を繰り広げたことを、当事者の著作や同時代の文献によって実際に確認することができない。また、各々が「バスラ学派」「クーファ学派」を代表すると自認していたわけでもない。

このような説に対して、*Versteegh* は、実際に9世紀の文献の中にも、バスラ学派やクーファ学派に対する言及が見られることや、クーファ学派の文法用語が一人の学者の力だけで発展したとは考えにくいことなどから、2つの学派が実在したという

本来持つ意味と性質を的確に言い表すものではない。本稿では敢えて訳出せず用いる。英語の訳語では、「verbal noun」(*Carter* 1981: 221, 342 ff.) が広く用いられる他、便宜的に「infinitive」(*Versteegh* 1995: xv. cf. 1977: x) を充てる学者もいる。*Flügel* は複数形 *maṣādir* に「Verbal-Nomina」「Nomina actionis」「Verbalnomina」という3種類の異なるドイツ語訳を使用する。*Flügel* 1862: 51, 125, 205.

2) *Ṭabaqāt*: 21, 125, 157, 191, 213, 225, 253.

3) *Fihrist*: 59, 96, 115. (cf. *Flügel* 1862: 3, 117, 183.)

4) *Weil* 1913: 48–68.

5) *Fleisch* 1961: 15, *Carter* 1973: 299, 301–3, 1990: 126–7, 2004: 134.

伝統的な考えに立っている⁶⁾。

何をもって「学派 *maḍhab*, *madrasa*」⁷⁾と呼ぶことが可能になるのかについても、様々なスタンスがあり、再検討が必要であろう。出身地、生活拠点、師弟関係などの社会的側面を重視する学者もいれば、同じアプローチ、文法用語を共有しているかという方法的側面を重視する学者もいる⁸⁾。学派を形成する要件としては、この二点に加え、意見対立が個人レベルにとどまらず、広範囲にわたっていたことが確認できるかどうかという点も重要である。

3. 先行研究にみられる「バスラ」「クーファ」についての言及

8世紀から10世紀にかけての文献における「バスラ」「クーファ」それぞれの言及箇所を数えたものとしては Owens, Bernards などの先行研究がある⁹⁾。Owens は9世紀から10世紀にかけての8つの文献¹⁰⁾にみられる「バスラ」「クーファ」についての言及数を数え、10世紀を境に言及回数が激増することを数値的に示した。たとえば9世紀の *al-Mubarrad*, *Muqtaḍab* には、「バスラ」が8回、「クーファ」が1回の言及がみられるのみである。これに対し、*az-Zağğāg* (d. 923), *Maʿānī al-Qurʾān* には、それぞれ43回、25回もの言及がみられるという¹¹⁾。

また、Bernards は、一般的な文法書の類に加えて、9世紀以降のタバカの書やその他の文献¹²⁾における「バスラ」「クーファ」に関する言及数や「*maḍhab*」の表現がみられるか否かをまとめている。これによると、*at-Tirmidī* (d. ca. 893) はバスラに対するクーファの優位性を主張しているという。また、*maḍhab* という表現は *as-Sirāfi* (d. 978) が初めて集団的方法論に対して用いたと述べる。

Baalbaki は、「バスラ」「クーファ」についての言及に関して、それが文法的側面についての言及であることと、集団としての言及であることの重要性を強調している。たとえば、彼によると、*Sībawayhi*, *Kitāb* では、実際に4箇所でもクーファに言及しているが、4箇所のうち3箇所はキラア *qirāʾat*¹³⁾に関するものであるという。*Kitāb* にはバスラ学派についての言及がない点を考え合わせると、*Sībawayhi* が学派

6) Versteegh 1977: 107-12.

7) 「*maḍhab*」に代わって「*madrasa*」が広く用いられるようになった経緯については Bernards 1997: 11. Carter 2000: 264を参照。

8) 「社会的側面」と「方法的側面」を分けることの重要性については Bernards 1997: 93-7を参照。

9) Owens 1988: 12, 267-8, 1990: 207, 1991: 236. Bernards 1997: 11-6.

10) Ḥalaf al-ʿAḥmar, *Muqaddima fī an-Naḥw*; Ibn as-Sikkīt, *ʿIṣlāḥ al-Manṭiq*; Ibn Qutayba, *ʿAdab al-Kātib*; *al-Mubarrad*, *al-Muqtaḍab*; Ibn Kaysān, *Kitāb al-Muwaffaqī fī Naḥw*; Taʿlab, *Mağālīs*; *az-Zağğāg*, *Maʿānī al-Qurʾān wa-ʾl-Rābu-hu*; Luğḍa, *Kitāb an-Naḥw*.

11) 最初の2巻だけのカウント結果。Owens 1991: 236.

12) *at-Tirmidī*, *Maḥṣūṣ Farid Nafīs ʿan Marātib an-Naḥwiyyīn*; *al-Muqriʾ*, *ʿAḥbār an-Naḥwiyyīn*; ʿAbū al-Ṭayyib, *Marātib an-Naḥwiyyīn*; *as-Sirāfi*, *ʿAḥbār an-Naḥwiyyīn al-Baṣriyyīn*; *az-Zubaydī*, *Ṭabaqāt an-Naḥwiyyīn wa al-Luḡawiyyīn*; *al-Marzubānī*, *Nūr al-Qabas al-Muḥtaṣar min al-Muqtabas*; *Ibn an-Nadīm*, *Kitāb al-Fihrist*; *at-Tanūḥī*, *Tārīḥ al-ʿUlamāʾ an-Naḥwiyyīn min al-Baṣriyyīn wa al-Kūfiyyīn wa ḡayri-him*.

13) Ibn Muğāhid によって認定された7通りのキラアのうち3つはクーファの学者のものである。

というものを認識していたとの結論をだすことはできないとしている。そして、文法的側面に関する点で「バスラの人々」が集団として扱われている最初の文献は、クーファの辞書学者 Ibn as-Sikkīt (d. ca. 857) の *'Islāḥ al-Manṭiq* であると結論付けている¹⁴⁾。このことは、バスラの文法家についての最も古い言及は al-Mubarrad, *al-Kāmil* であるとする Weil の見解とは異なる¹⁵⁾。つまり、Baalbaki は Weil が想定している時期より約50年早い時代に「文法学派」が認知されていたと考えている。

3-1. Ibn Qutayba, *'Adab al-Kātib* にみられる言及

Ibn Qutayba (d. 889)¹⁶⁾, *'Adab al-Kātib* (以下、*'Adab*) は、主として修辞法や正書法を説いたもので、一般的な意味での文法書ではないが、al-Mubarrad と同時代の9世紀後半の文献であることと、「バスラ」「クーファ」のどちらにも属さない学者が書いたという点から、学派間の意見対立を記録した資料として重要な地位を占める。しかし、これまで、学派についての言及という観点からの研究は極めて限られており、十分に行われてきたとは言えない。数少ない研究に Owens のものがあり、*'Adab* に現れる「バスラ」「クーファ」両学派の言及はそれぞれ1回ずつであると記している¹⁷⁾。

この点について *'Adab* で実際に確かめてみると、「バスラの人々 al-baṣriyyūn/-īn」という表現が10箇所を確認できることがわかった¹⁸⁾。また、「クーファの人々」は全くみられないが、「バグダードの人々 al-baġdādiyyūn/-īn」は4箇所使われている¹⁹⁾。「バグダードの人々」が言及される箇所では必ず「バスラの人々」が言及されているが、各学派の意見対立という構図からの記述は限定的である。たとえば、バスラの人々を支持し、バグダードの人々の用法を間違いであると断定している部分が1箇所 (ibid. 240) しかみられない。残りの箇所では、バスラとバグダードの人々のそれぞれの見解が併記され、正誤の判断を加えていない部分が2箇所 (ibid. 190, 410) あり、バスラとバグダードの人々が同じ見解であることを示している部分が1箇所 (ibid. 314) ある。

また、一般的なバスラ、クーファ学派の分類とは相容れず、不正確な表現も見られる。たとえば、「これは、al-'Aḥfaṣ̣ḥや他のバスラの人々の言葉であり、al-Farrā'や他のバグダードの人々は、間違っ次のように言う。hādā qawl al-baṣriyyīn al-'Aḥfaṣ̣ḥ wa-ġayri-hi, wa-'ammā al-Farrā' wa-ġayru-hu min al-baġdādiyyīn fa-yaġ'alūna-hu min ġalaṭi-him, miṭl (ibid. 240)」といった表現では、バスラの人々の代表として Sibawayhi や al-Mubarrad ではなく al-'Aḥfaṣ̣ḥの名を挙げている。さらには、al-Farrā' を「クーファ」ではなく「バグダード」と関連づけている。

14) Baalbaki 1981: 6.

15) Weil 1913: 57.

16) Ibn an-Nadīm は「二つの学派を融合した文法家・辞書学者」66人の筆頭に Ibn Qutayba の名を挙げている。 *Fihrist*: 115-29.

17) この数字は Fück 1950 からの引用であり、最小値であると断っている。 Owens 1991: 236-5.

18) *'Adab*: 190, 240, 261, 314, 401, 404, 408, 410, 412, 412.

19) *'Adab*: 190, 240, 314, 410.

なお、バスラ学派の文法家のうち、Sībawayhi や al-'Aḥfaṣh に関する言及は多数見られるものの、同時代にバグダードに居住し、バスラ学派を代表する文法家として多くの弟子を持っていた al-Mubarrad についての言及自体もみられない。また、同様に Ta'lab についての言及もみられない。

「maḍhab」という表現についても、「hādā maḍhab al-baṣriyyīn ('Adab: 190)」が一箇所みられるが、hādā が指し示すものは直前の文例における定冠詞の用法であり²⁰⁾、文脈から言って maḍhab は「学派」と解釈するのは不可能である。

以上のことから、'Adab からは、9世紀後半にバスラとクーファの学派それぞれの学者間で、集団としての広範囲な意見対立があったことを示す記述を見出すことができないことがわかった。

3-2. Ibn as-Sarrāḡ, al-'Uṣūl fī an-Naḥw にみられる言及

al-Mubarrad の最年少の弟子に Ibn as-Sarrāḡ (d. 928)²¹⁾ がいる。彼の主著 al-'Uṣūl fī an-Naḥw (以下、'Uṣūl) は、3巻で全1300頁を越える大著であり、バスラ、クーファの両学派に関連する記述も豊富である。特に、クーファ学派の文法的見解、方法論を伝える資料は、この書以前にはほとんど見られない。初版が1985年ということもあり、包括的な研究は多くなく²²⁾、特に、バスラ、クーファについての言及については、前述の Owens や Bernards の研究においても扱われていない。以下では、'Uṣūl 3巻を通して他の文法家に対する言及回数を調べた結果に基づき、当時のバスラ、クーファ両学派に関する認識についてまとめる。

まず、言及回数を単純に数えると、al-baṣriyyūn 38回、'ahl al-baṣra 2回、al-kūfiyyūn 62回、'ahl al-kūfa 2回となる。この数字は、前述の Owens による az-Zagḡāḡ, Ma'ānī al-Qur'ān の言及数 (バスラ43回、クーファ25回) と同様、10世紀以降の文献に共通する特徴である「学派」に対する言及の多さを示している。10世紀初頭には、少なくともバスラとクーファのそれぞれの学者の見解が、不十分な形であれ、集約され、標準的な文法の構築が模索されていく中で、個々の文法家が「バスラ」「クーファ」を相当程度意識して記述を行っていたことをうかがわせる。さらに、師と仰ぐバスラ学派の先人たち²³⁾を、名前を挙げて具体的に言及する箇所が非常に多いことも注目に値する²⁴⁾。たとえば、Sībawayhi の名が411回も言及されているのを筆頭に、al-Ḥalīl 154回、'Abū al-'Abbās²⁵⁾ 141回、al-'Aḥfaṣh 129回と続く。一方の、クー

20) ḡams-u mi'at-i 'alf-i d-dirham-i の例におけるバスラ学派の定冠詞の使い方を指す。

21) 出身地は不明であるが、バグダードに居住。弟子に az-Zagḡāḡī, as-Sīrāfī, al-Fārisī, ar-Rummānī らがいる。

22) Ibn as-Sarrāḡ を総合的に扱った研究に Yūsuf 2000 がある。

23) Ibn as-Sarrāḡ はバスラ学派の先人たちを 'aṣḥābu-nā' と呼ぶ。'Uṣūl I: 87, 151, 232, 351.

24) 10世紀以降の文法書がすべて、学派や学者に関する言及が多いというわけではない。たとえば、13世紀の Ibn 'Uṣfūr, Muqarrib では、Sībawayhi に関する言及が全く見られず、「クーファ」に対する言及も1回しか見られない。

25) 'Uṣūl における al-Mubarrad の呼称。

ア学派の学者については、al-Farrā' 59回、al-Kisā'i 38回、Ta'lab²⁶⁾ 6回と、言及回数は少なくなる。

以上のように、数値だけをとれば、'Uṣūl は、それ以前の文献とは異なり、「バスラ」「クーファ」という観点からの記述が非常に多いと言える。また、バスラ学派の学者、特に al-Mubarrad の影響を受けている部分は数多い。しかし、このことによって、Ibn as-Sarrāḡ が、「学派」の間の意見の相違をことさら強調していることにはならないし、バスラ側の立場からクーファ側を批判することを目的にしているわけでもない。このことは、以下のことから明らかである。

まず、maḏhab Sibawayhi 14回、maḏhab al-baṣriyyīn 2回、maḏhab al-kūfiyyīn 3回のように maḏhab という表現は多く見られるが、すべての箇所において、「方法論」「見解」などと解釈するのが適当であり、「学派」を意味すると解釈できる箇所はみられない。また、Ibn as-Sarrāḡ は al-Mubarrad の弟子でありバスラ学派の学者に分類されるが、バスラ側の見解を擁護し、クーファ側の見解を論駁しようという姿勢が欠如している。むしろ、客観的、かつ冷静な記述が目立つ。たとえば、al-Mubarrad と al-Kisā'i が同じ見解で al-Farrā' が異なる見解を持つ例 (ibid. I: 221)、Sibawayhi と al-Kisā'i が同じ見解で al-Farrā' が異なる見解を持つ例 (ibid. II: 244)、バスラの人々と al-Farrā' が同じ見解で al-Kisā'i が異なる見解を持つ例 (ibid. I: 321) などの記述がみられる。これらの箇所では、バスラ側 (Sibawayhi, al-Mubarrad) とクーファ側 (al-Kisā'i, al-Farrā') が対立関係にあるという図式を読み取ることができない。

その他にも、クーファ側の見解について、非常に多くの記述がみられるが、正誤の判断には踏み込まず保留している場合が多いことや、バスラ、クーファに言及する部分のうち、文法用語の違いを言及した部分が多いこと、クーファ学派の文法用語²⁷⁾を多用することなども、Ibn as-Sarrāḡ が必ずしも、バスラ側の視点からのみ文法記述を行っているのではないことがうかがえるであろう。

4. マスダル maṣdar と動詞との関係の記述

文法用語としての「マスダル maṣdar」は、比較的初期の時代から使われていた。Troupeau によれば、Sibawayhi, *Kitāb* の中で、一般名詞としての用例を含め maṣdar が335回用いられている²⁸⁾。これに加え、maṣdar の意味で ḥadaṭ が6回、ḥadaṭān が1回現れる。他の文法用語と同様に、特に10世紀までは、複数の用語が併用されることはしばしばあり、maṣdar も例外ではない。しかし結局、ḥadaṭ や ḥadaṭān といった用語は定着しないまま maṣdar に取って代わられる。試みに、al-Farrā', *Ma'ānī* を調べてみても、やはり maṣdar が120回と多く用いられており、ḥadaṭ や ḥadaṭān が用い

26) 3箇所は Ta'lab と呼ばれるが、残りの3箇所は 'Aḥmad ibn Yaḥyā と呼ばれる。'Uṣūl I: 324, 407, II: 235.

27) ḥafḍ ('Uṣūl I: 46, 47, 408, 415), mufasssir (ibid. I: 225, II: 229), makniyy (ibid. I: 149, 215, II: 78), fi'ī dā'im (ibid. I: 183).

28) Troupeau 1976: 123.

られている例を見出すことはできない。*‘Uṣūl* では、*maṣḍar* が、一般名詞としての用例も含め311回確認できる。*ḥadaṭ* も3箇所で6回用いられるが、3箇所とも *maṣḍar* と併記され、*ḥadaṭ* は先人が使っていた用語であるとの扱いがなされている²⁹⁾。また、*ḥadaṭān* が使用される例はみられない。

マスダルと動詞の関係について、多くの文法書、教科書に共通する記述は、次の4点である。

- (1) マスダルを元に動詞が形成された。
- (2) マスダルは名詞である。ただし、一般名詞とは区別される。
- (3) マスダルと異なり、動詞は3つの「時」を含む変化をする。
- (4) マスダルは動詞と同様の統語的性質を持つことがある。

このうち、(1)「マスダルを元に動詞が形成された」という点は、*Sībawayhi* の次の表現でも確認することができる。「動詞とは動名詞をもとに形成された語形を持つものである *wa-‘ammā al-fi‘l fa-‘amṭila ‘uḥḍat min lafẓ ‘aḥḍāt al-‘asmā’* (*Kitāb* I: 1)」この場合の *‘uḥḍ-a min* は語源関係を示すと考えられる。もともと、後の時代の文法家の記述にはこのような曖昧な表現は見られなくなり、多くの場合、動詞 *ṣadar-a ‘an* や *‘iṣtaqq-a min* (又は能動分詞 *muṣtaqq min*)、*ḡarā ‘alā* などの表現が一般化してゆく³⁰⁾。

一方、これとは真っ向から対立する、いわゆるクーファ学派の主張「マスダルは動詞をもとに形成された」については、ほとんどの文法書・注釈書・学習書では触れられていない³¹⁾。また、*al-Farrā’*, *Ma‘ānī* や *Ta‘lab*, *Maḡālis* といったクーファ側の資料で、マスダルに関連するクーファの主張を裏付けるような部分は確認できない。クーファの主張は、バスラ学派に分類される文法家や、後の学者による二次的な引用の中で現れるにとどまる。

マスダルの位置づけをめぐる、バスラ学派とクーファ学派の意見対立という観点からの記述がみられるものは、10世紀の *az-Zaḡḡāḡī*, *‘Idāḥ* の他、12世紀の *Ibn al-‘Anbārī*, *‘Inṣāf* や13世紀以降の一部の文献に限られる。以下では、これらの文献にみられる記述の変遷をまとめる。

4-1. *Ibn al-‘Anbārī* の記述

マスダルと動詞の関連をめぐる、バスラ学派とクーファ学派が意見を異にしていることを、最も明確かつ詳細に示しているものに、12世紀の *Ibn al-‘Anbārī*, *al-‘Inṣāf fī Masā’il al-Ḥilāf bayna an-Nahwiyyīn al-Baṣriyyīn wa al-Kūfiyyīn* (以下、*‘Inṣāf*) がある。

29) *‘Uṣūl* I: 39, 160, II: 413. (cf. *Mufaṣṣal*: 31)

30) *ṣadar-a ‘an* を用いる例は *‘Uṣūl* I: 122, *Mufaṣṣal*: 31. *‘iṣtaqq-a min* 又は *muṣtaqq min* を用いる例は *‘Uṣūl* I: 122, 137, 159, *Ġumal*: 44, *Luma’*: 20. *ḡarā ‘alā* を用いる例は *Šarḥ Kāfiya* II: 191, *Muqarrib*: 468, *Qaṭr*: 284, *Šudūr*: 286, *‘Awdāḥ* II: 33.

31) 少なくとも、*Kitāb*, *Muqtaḍab*, *‘Uṣūl*, *Ġumal*, *Luma’*, *Mufaṣṣal*, *Šarḥ Kāfiya*, *Muqarrib*, *Šarḥ Ġumal*, *Qaṭr*, *Šudūr*, *‘Awdāḥ* では確認できない。

同書28番目の争点として、「マスダルが動詞の起源」というバスラ学派の主張と、「動詞がマスダルの起源」というクーファ学派の主張とが対比されている。最初にクーファ学派が主張する5つの根拠を紹介した後、バスラ学派の8つの根拠を示し、さらにクーファ学派の5つの根拠のそれぞれに反論を加えるという構成になっている。

「マスダルは動詞の下位範疇のひとつである *al-maṣḍar far‘ ‘alā li-fi‘l*」という、クーファ学派の5つの根拠の要点は以下の通りである³²⁾。

- K1. 規則動詞のマスダルは規則的になり、不規則動詞のマスダルは不規則になる。動詞 *qāwam-a* とマスダル *qiwām*、動詞 *qām-a* とマスダル *qiyām* の関係が示す通りである。
- K2. 動詞がマスダルの作用子となる。*ḍarab-tu ḍarb-an* のマスダル *ḍarb* が対格をとるのは、動詞 *ḍarab-tu* のため。作用子である動詞は、被作用子であるマスダルより階層は上位にある³³⁾。
- K3. マスダルは動詞を強調するのに用いられる。強調されるものの方が、強調するものより階層は上位にある。
- K4. 動作主の行為がなければ、マスダルはその意味を体現し得ない。動詞があつてこそマスダルが認知される。
- K5. 「動詞を起源とする *maṣḍūr ‘an al-fi‘l*」の意味で「マスダル」と名付けられた。*markab*, *maṣṣab* が *markūb*, *maṣṣrūb* の意味を持つと同様である。

これとは反対に、「マスダルは動詞の起源である *al-maṣḍar ‘aṣl li-l-fi‘l*」とする、バスラ学派の根拠の要点は以下の通りである³⁴⁾。

- B1. マスダルは特定されない時 (*zamān muṭlaq*) を示し、動詞は特定の時 (*zamān mu‘ayyan*) を示す。特定されないもの (*muṭlaq*) は特定されたもの (*muqayyad*)³⁵⁾ の起源である。
- B2. マスダルは名詞である。名詞は自立的なものであり、動詞なしでも成り立つが、動詞はそれ自体で成り立ち得ず、名詞を必要とする。自立できるものは、他に依存するものより優位に立つ³⁶⁾。
- B3. 動詞は、起こったこと (*ḥadaṭ*) と時 (*zamān muḥaṣṣal*) の二つを示すが、マスダルは起こったこと (*ḥadaṭ*) の一つを示す。一つを示すものが、二つを示すものの起源である。
- B4. 動詞はマスダルが示すものを示すが、マスダルは動詞が示すものを示すわけではない。つまり、「*ḍarab-a* 彼は殴打した」は、「*aḍ-ḍarb* 殴打」が示すことを示すが、「*aḍ-ḍarb* 殴打」は、「*ḍarab-a* 彼は殴打した」が示すことを示す

32) *‘Inṣāf* I: 235-6.

33) Ibn as-Sarrāḡ の主張と比較のこと。‘i‘lam ‘anna al-maṣḍar ya‘malu ‘amal al-fi‘l li-‘anna al-fi‘l ‘uṣtuqqa min-hu. *‘Uṣūl* I: 137.

34) *‘Inṣāf* I: 237-9.

35) *muṭlaq* と *muqayyad* に関する文法家の解釈については、Levin 1991: 920-3 に詳細な分析がある。

36) 名詞は動詞より階層が高いという点ではバスラ学派もクーファ学派も意見が一致している。*‘Iqāḥ*: 83.

わけではない。銀食器は銀を示すが、銀は銀食器を示すわけではないのと同様である。

- B5. 仮に動詞から派生したのであれば、マスダルは、能動分詞や受動分詞のように類推できる規則的な語形になるはずである。しかし、マスダルには様々な語形が存在する。
- B6. 仮に動詞から派生したのであれば、能動分詞や受動分詞が「起こったこと (*ḥadaṭ*)」と「動作主」「被動作主」を示すのと同様に、マスダルは、動詞の示す「起こったこと (*ḥadaṭ*)」と「時 (*zamān*)」に加え三つ目のものを示すはずである。
- B7. 動詞 *'akram-a* から派生した能動分詞と受動分詞はそれぞれ *mukrim*, *mukram* となり、語頭のハムザが消失する。もし仮に、マスダルが動詞から派生したのなら、マスダル *'ikrām* の語頭のハムザは消失するはずである。
- B8. マスダルの意味は「起源となった場所」であり、動詞がマスダルを起源としたことからこの名がある。

なお、同じ Ibn al-'Anbārī による文法書 *'Asrār* で確認すると、より簡潔な表現となり、構成としてはバスラ側の主張の後にクフア側の主張が置かれるといった違いがみられる。クフア側の主張は3つ、バスラ側の主張は7つに減っている³⁷⁾。バスラの主張のうち、上記 B7 の語頭のハムザによる説明は削除されている³⁸⁾。また、順序も変わっており、B8-B1-B3-B2-B6-B5-B4 と並べ替えられている。クフアの主張については、上記 K4, K5 は省略されている。

4-2. Ibn al-'Anbārī と az-Zaḡḡāḡī の比較

Baalbaki の研究によると、Ibn al-'Anbārī が *'Inṣāf* であげている121の争点のうち、およそ3分の1は、実際に Sībawayhi, al-Mubarrad と al-Farrā' との間の意見対立であることが確認できるという³⁹⁾。では、マスダルに関する意見対立に関する記述はどの程度遡ることができ、それが実際に誰と誰との意見対立であるかを確認できるのだろうか。

マスダルと動詞の関連について、Ibn al-'Anbārī, *'Inṣāf* と同程度の詳しい記述が見られる数少ない文献の一つに、10世紀前半の az-Zaḡḡāḡī, *al-'Īdāḥ fī 'Ilal an-Naḥw* (以下、*'Īdāḥ*) がある。マスダルをめぐる意見対立が Sībawayhi と al-Farrā' との間のものであるとの記述はもちろん、両学派で意見が異なっていることさえ、*'Īdāḥ* より前の文献で確認するのは難しい⁴⁰⁾。

37) *'Asrār*: 171-5. なお、*'Asrār*: 175 に *'Inṣāf* についての言及があるため、*'Inṣāf* の後に *'Asrār* を著したものと考えられる。

38) *'Asrār* で採用されなかった理由は不明であるが、動詞派生形のうち *fa'ala* や *fā'ala* ではこの議論は成り立たず、説得力の弱い論拠ではある。

39) Baalbaki 1981: 24.

40) 少なくとも次に挙げる文献では確認できなかった。Sībawayhi, *Kitāb*; al-Farrā', *Ma'ānī*; al-'Aḥfaṣ, *Ma'ānī*; Ibn Qutayba, *'Adab*; al-Mubarrad, *Muqtaḍab*; Ta'lab, *Maḡālīs*; Ibn as-Sarrāḡ, *'Uṣūl*.

‘*Idāh* が著された正確な年は不明であるが、*Ġumal* よりも前の時期に書かれたと考えられる⁴¹⁾。学派対立を中心に扱うものではないため、‘*Inṣāf* とは取り上げられているテーマも大きく異なるが、23章から成る ‘*Idāh* の第4章に「動詞とマスダルについての章——どちらが他方の語源なのか」のタイトルで、バスラ側の立場を明確に示しつつ、バスラとクーファのそれぞれの主張を詳しく記している。

まず、バスラ側の主張については「Sibawayhi とバスラの人々はすべて、このように述べている。動詞はマスダルをもとにつくられたものであり、動詞との関連においてマスダルは一次的なものである。マスダルは動詞的名詞であるからだ。qāla Sibawayhi wa-ḡami‘ al-baṣriyyīn: al-fi‘l ma’ḥūḍ min al-maṣdar wa-l-maṣdar sābiq la-hu fa-huwa ‘ism al-fi‘l. (‘*Idāh*: 56)」また、これに対するクーファ側の見解は、「al-Farrā’ とクーファの人々はすべて、このように述べている。マスダルは動詞をもとにつくられたものであり、マスダルとの関連において動詞は一次的なものである。マスダルは動詞との関連では二次的なものなのである。qāla al-Farrā’ wa-ḡami‘ al-kūfiyyīn: al-maṣdar ma’ḥūḍ min al-fi‘l, wa-l-fi‘l sābiq la-hu wa-huwa tānin ba‘da-hu. (ibid.)」と記す。

Ibn al-‘Anbārī, ‘*Inṣāf* と az-Zaḡḡāḡī, ‘*Idāh* とは大筋で記述の仕方が似てはいるが、詳細に比較すると、相違点も数多く見受けられる。まず、‘*Idāh* で挙げられている根拠の数はバスラ5、クーファ3であり、‘*Inṣāf* のバスラ8、クーファ5より少ない。それぞれを比べてみると、‘*Idāh* では B1, B3, B6, B7, K2, K4 を確認することはできない。反対に、‘*Inṣāf* にはなくて ‘*Idāh* にはあるバスラ側の根拠が1点ある。それは、‘*Idāh* でバスラ学派の主張であるとして3番目に挙げられているもので、「‘ubūdiyya, ruḡūliyya, bunuwwa, ‘umūma, ‘umuwwa などのように対応する動詞が全く存在しないマスダルがある」という根拠である。なお、これは彼の師である ‘Abū ‘Ishāq az-Zaḡḡāḡ の言葉であるとしている⁴²⁾。

ほとんど典拠を明示していない ‘*Inṣāf* に比べると、‘*Idāh* には、それぞれが誰の言葉なのかという情報が多い。‘*Idāh* では B5 が Ibn as-Sarrāḡ のものであることを明言しているし、このことは ‘*Uṣūl* でも確認できる⁴³⁾。また、K3 と K5 は ‘Abū Bakr ibn al-‘Anbārī⁴⁴⁾ の言葉であるとする。特に K5 は彼と自分との論争の中で交わされたものだとし、2頁にわたって詳しく紹介する⁴⁵⁾。この中で、K5は al-Farrā’ の意見であると ‘Abū Bakr ibn al-‘Anbārī は述べたが、このことを ‘Abū Bakr ibn al-Ḥayyāt⁴⁶⁾ に伝えたと、彼は al-Farrā’ の言葉でもないし、彼の著書にも見られないと答えた旨記し

41) *Ġumal*: 5 に ‘*Idāh* に関する記述がある。

42) ‘*Idāh*: 58-9.

43) 「能動動詞と同じように、マスダルが仮に動詞を語源とするのなら、様々に異なるものにはならなかっただろう wa-law kānat al-maṣādir ma’ḥūḍa min al-fi‘l ka-‘ism al-fā‘il la-mā ‘iḥṭalafat, ka-mā lā yaḥṭalifu ‘ism al-fā‘il.」 ‘*Uṣūl* III: 85.

44) ‘*Idāh* でしばしば批判を受けるクーファ学派の文法家。Ta‘lab らに学び、939年バグダードにて没す。Ṭabaqāt: 153, Buḡya I: 212.

45) ‘*Idāh*: 60-2.

46) サマルカンド生まれ。az-Zaḡḡāḡ と議論を交わし、az-Zaḡḡāḡī や al-Fārisī が彼に学んだ。バスラ学派とクーファ学派の文法を融合させたと伝えられる。Buḡya I: 48.

ている。

以上のように、*'Inṣāf* と *'Īdāḥ* にほぼ共通するのは、B2, B4, B5, B8, K1, K3, K5 の7点であり、*'Inṣāf* の13の記述のうちおよそ半分は *'Īdāḥ* で確認できないことになる。

4-3. 13世紀以降の記述

13世紀の文献には、マスダルをめぐる学派間の対立に関して Ibn al-'Anbārī, *'Inṣāf* より詳細なものを見つけることは困難であるが、比較的詳しい記述がみられるものに、Ibn Ya'īš (d. 1245), *Šarḥ al-Mufaṣṣal* と、Ibn Mālik (d. 1274), *Šarḥ at-Tashīl* がある。まず、Ibn Ya'īš は、バスラ側の主張を3点 (B3, B5, B8)、クーファ側の主張を2点 (K1, K2) の要素を記すにとどまり、*'Inṣāf* で記述されたものに新しい説や見解の追加は見られない。

Ibn Mālik の記述方法は他と比べて簡潔で、表現方法もそれ以前の文献と比べてかなり洗練されている。彼は、バスラ学派の主張が正しいとした上で、その理由を5点に分けて解説する⁴⁷⁾。

- ① 本質的に1つの形であるマスダルが、完了形、未完了形、命令形の3つの形を持つ動詞から派生したとは考えにくい。
- ② 単一の意味を持つマスダルと、起こったことと時とが組み合わせられた動詞とでは、単一のものが組み合わせられたものに比べ根源的なものである。
- ③ マスダルの概念は一般的であり、動詞の概念は個別のものである。一般を示すものが、個別を示すものの起源である。
- ④ 下位範疇にあるものは、元になったものに何らかのものが加わっている。動詞はマスダルの意味に、時の指定というものが加わっている。
- ⑤ 動名詞の中には、対応する動詞が存在しないものがある。

一見したところ、Ibn Mālik は *'Inṣāf* とは異なる記述の仕方を採用している。しかし、①, ②, ④ は *'Inṣāf* の B3 に対応し、それを細分化したものである。③ は、*'Inṣāf* にも *'Īdāḥ* にも見られない。⑤ は *'Inṣāf* には見られないが、前述のように *'Īdāḥ* には見られる。

これらのことから、13世紀の *Šarḥ al-Mufaṣṣal* と *Šarḥ at-Tashīl* の2書と、前述の az-Zağgāgī, *'Īdāḥ*, Ibn al-'Anbārī, *'Inṣāf* との間には、記述内容の質と量において少なからぬ差異が確認される。特に、各学派の主張を裏付ける根拠について、4書に共通して記述がみられるのは、*'Inṣāf* での各学派の主張 B5, B8, K1に限られる。

4-4. 14世紀以降の記述

14世紀以降の文献には、Ibn 'Aqīl (d. 1367), *Šarḥ al-'Alfiyya* や as-Suyūfī (d. 1505), *Ham' al-Hawāmi' fi Šarḥ Ġam' al-Ġawāmi'* のような、若干ではあるが、新しい情報が

47) *Tashīl* II: 107-8.

加えられたものが存在する。Ibn ‘Aqīl は、分詞 *waṣf*⁴⁸⁾ の扱いについて、「バスラ学派によれば、マスダルが語源となって動詞と分詞が派生した *Šarḥ* II: 171」⁴⁹⁾ としている。さらに、「マスダルが語源となって動詞が派生し、動詞から分詞が派生した *ibid.*」⁵⁰⁾ というバスラ学派でもクーファ学派でもないとする主張や、「マスダルも動詞も、どちらか一方が、他から派生したのではない」という Ibn Ṭalḥa⁵¹⁾ のものであるとする主張を加えて紹介している⁵²⁾。

以上でみたように、12世紀の Ibn al-‘Anbārī 以降においても、マスダルから動詞が派生したというバスラ学派の主張が標準となり続けるわけであるが、その裏付けとなる論拠は、必ずしも *az-Zağğāgī* や Ibn al-‘Anbārī のものが忠実に受け継がれていくわけではないことは注目すべきであろう。

5. おわりに

本稿では、8世紀から9世紀の終わりにかけての「バスラ」「クーファ」の両学派が、Weil の言うような「フィクション」であったのか、それとも実体のある存在として認知されていたのかを考察するために、先行研究に二つの観点から基礎的資料の補足をおこなった。

一つ目の観点からは、Ibn Qutayba, ‘*Adab* と Ibn as-Sarrāg, ‘*Uṣūl* に現れる、両学派に関する言及を整理した。その結果を以下の (i) から (vi) にまとめる。

- (i) ‘*Adab* にも ‘*Uṣūl* にも, *maḡhab* を学者の集団としての「学派」の意味で用いている箇所はない。
- (ii) 9世紀後半にバグダードに居住していた Ibn Qutayba が, ‘*Adab* の中で *al-Mubarrad* や *Ṭa‘lab* に触れていない。
- (iii) ‘*Adab* では「バスラ」「クーファ」の両学派の対立という観点からの記述をしていない。また、クーファについての言及が全くみられない。
- (iv) Ibn Qutayba は「クーファの人々」と「バグダードの人々」について事実誤認をしていると思われる記述がある。
- (v) 10世紀前半の ‘*Uṣūl* には、「バスラ」「クーファ」に関する記述が急増する。クーファ学派の学者の見解に論駁を加えるといった姿勢が見られず、冷静で客観的な記述が目立つ。
- (vi) ‘*Uṣūl* には、「クーファ学派」のものであるとされる文法用語が多用されている。

48) *waṣf* は一般的には「形容詞」を意味するが、ここでは「分詞」を指す。

49) *as-Suyūṭī* によれば、この主張は「ほとんどのバスラ学派の人々 *Hamf* II: 72」のものであるという。

50) *as-Suyūṭī* は「バスラ学派には、この考えをとるものもいる *ibid.*」と、バスラ学派に関連付ける。
Ibn as-Sarrāg はこの立場をとると解釈できる。‘*Uṣūl* III: 85.

51) セビリヤの学者 Muḥammad ibn Ṭalḥa ibn Muḥammad (d. 1221) を指すものと考えられる。独特の文法観を持ち、他の学者と対立していた文法家 Ibn aṭ-Ṭarāwa (d. 1134) の影響を受けていたと伝えられる。 *Buḡya* I: 121, 602.

52) Ibn Mālik は「バスラの人々もクーファの人々も、動詞とマスダルの関係は、どちらかがどちらかの起源となったという点では一致している *Tashīl* II: 107」と記述し、Ṭalḥa の見解を否定する。

以上のことは、9世紀後半に al-Mubarrad と Ta'lab が、それぞれの学派に分かれて論争を繰り広げていたということの有力な根拠とはなり得ない。むしろ、当時のバグダードにおいては、「バスラ」と「クーファ」の学派の対立の詳細を、Ibn Qutayba さえ正確に把握していないほど、重要視されていなかったことを示すのではないだろうか。

また、10世紀前半の Ibn as-Sarrāḡ は、師である al-Mubarrad に敬意を払いつつも、客観的記述に徹し、必ずしも「バスラ学派」の一員であるという連帯感や自覚を感じさせない文法書 *'Uṣūl* を残した。この書の記述は、同じ文法的見解を共有する者どうしが集団を形成し、意見を異にする他の集団と対立するという構図からは説明がつかない。これについては、10世紀という時代的な背景や、Ibn as-Sarrāḡ の独自性から説明ができるかどうかは、今後の課題として残っている。いずれにしても、*'Uṣūl* の記述は、「バスラ」「クーファ」の相違が意識され、学者ごとの意見の対立があったことの根拠にはなり得るが、二つの学派間に画然とした見解の相違が存在し、様々な文法項目にわたって論争を繰り広げたということを示す有力な材料が得られたとはいえない。

本稿で試みたもう一つの観点としての、マスダルと動詞の関係についての意見対立の変遷については、以下 (vii) から (x) を確認することができた。

- (vii) 「マスダルから動詞がつけられた」という考え方が、バスラ学派の標準として受け継がれてきた。また、この考え方は8世紀の Sibawayhi, *Kiṭāb* に遡ることができる。
- (viii) マスダルと動詞の関係について、学派間の意見対立が存在したことに言及するものは極めて限られている。10世紀前半の az-Zaḡḡāḡī, *ʿIdāḥ* 以前の文献で確認することはできなかった。
- (ix) 10世紀以降、13世紀までの間に、学者によってバスラ側、クーファ側双方の主張として採用しているものに、大きな隔たりがある。az-Zaḡḡāḡī, Ibn al-ʿAnbārī, Ibn Yaʿīṣ, Ibn Mālik の記述に共通するものが少ない。
- (x) 13世紀以降も、新たな説を唱える学者が現れたことが Ibn ʿAqīl, *Šarḥ* や as-Suyūṭī, *Hamʿ* など複数の文献で確認される。

マスダルの位置づけに関する意見対立に限って言えば、8世紀から9世紀の Sibawayhi や al-Mubarrad の時代に意見対立があったかどうかを二次的資料においても確認することはできない。10世紀前半の *ʿIdāḥ* でようやく「学派」間の意見対立の存在が記述されているわけであるが、同時代の他の文献で、これを裏付けることができないほど情報は限られている。

また、10世紀以降の変遷をみると、*ʿIdāḥ* と *ʿInṣāf* とでは、記述が重複するものはおよそ半分にすぎない。それ以降の他の文献を含めると、重複するものはさらに少なくなる。このことは、9世紀までに繰り広げられたとされる論争を記録して、忠実

に受け継がれていったわけではなく、*ʿIdāḥ* で確認されるような各学派の主張とされるものが、後に、追加又は削除されながら伝えられたことを意味する。

以上のことから、マスダルの位置づけに関する「学派」間の意見対立は、少なくとも、10世紀前半に、おそらくは az-Zagğāḡī が論敵 ʿAbū Bakr ibn al-ʿAnbārī らとの議論の中で、主要な論点の一つに取り入れた後も、度々論争が起こったことをうかがわせる。マスダルの位置づけに関する両学派の「論争」は、9世紀までに完結した出来事であるというより、むしろ10世紀以降に展開し、議論が盛んになっていったものであると解釈すべきである。そして、このことは、Weil の説を裏付ける一つの材料になるものと考えられる。

[アラビア語転写方式]

(ي و ه ن م ل ك ق ف غ ع ظ ط ض ص ش س ز ر ذ د خ ح ج ث ت ب ء)
(ʿ b t t ġ ḥ ḥ d d r z s š š ḍ ṭ ṣ ʿ ġ f q k l m n h w y)

[参考文献]

[アラビア語原典]

- al-ʿAḥfaṣ, *Maʿānī* = ʿAbū al-Ḥasan Saʿīd ibn Maʿʿada. *Maʿānī al-Qurʿān*. Ed. by Hudā Maḥmūd. 2 vols. al-Qāhira: Maktabat al-Ḥānḡī, 1990.
- al-ʿAstarābādī, *Šarḥ* = Raḍī ad-Dīn Muḥammad ibn Ḥasan. *Šarḥ Kāfiyat Ibn al-Ḥāḡib*. 2 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-ʿIlmiyya, 1969.
- al-Farrāʾ, *Maʿānī* = ʿAbū Zakariyyā Yaḥyā ibn Ziyād. *Maʿānī al-Qurʿān*. Ed. by Muḥammad ʿAlī an-Naḡḡār. 3 vols. al-Qāhira: Dār as-Surūr, n.d.
- al-Ġurḡānī, *Muqtaṣid* = ʿAbū Bakr ʿAbd al-Qāhir ibn ʿAbd ar-Raḥmān. *Kitāb al-Muqtaṣid fī Šarḥ al-ʿIdāḥ*. Ed. by Kāzīm Baḥr al-Marʿāh. 2 vols. Baḡdād: Wizārat at-Taḡāfa wa al-ʿIḡlām, 1982.
- al-Ḥalīl, *Ġumal* = al-Ḥalīl ibn ʿAḥmad al-Farāhidī, *al-Ġumal fī an-Naḥw*. Ed. by Faḥr ad-Dīn Qabāwa. Bayrūt: Muʿassasa ar-Risāla, 1985.
- Ibn al-ʿAnbārī, *ʿAsrār* = ʿAbū al-Barakāt ʿAbd ar-Raḥmān ibn Muḥammad. *ʿAsrār al-ʿArabiyya*. Ed. by Muḥammad al-Biṭār. Dimašq: al-Maḡmaʿ al-ʿIlmī al-ʿArabī, 1957.
- Ibn al-ʿAnbārī, *ʿInṣāf* = ʿAbū al-Barakāt ʿAbd ar-Raḥmān ibn Muḥammad. *al-ʿInṣāf fī Masāʾil al-Ḥilāf bayna an-Naḥwiyyin al-Baṣriyyin wa al-Kūfiyyin*. Ed. by Muḥammad Muḥyī ad-Dīn ʿAbd al-Ḥamīd. 2 vols. Bayrūt: Dār al-Fikr, 1982.
- Ibn ʿAqīl, *Šarḥ* = Bahāʾ ad-Dīn ʿAbdullāh. *Šarḥ al-ʿAlfiyya*. Ed. by Muḥammad Muḥyī ad-Dīn ʿAbd al-Ḥamīd. 2 vols. al-Qāhira: Dār at-Turāt, 1998.
- Ibn Ġinnī, *Lumaʿ* = ʿAbū al-Faṭḥ ʿUṡmān. *Kitāb al-Lumaʿ fī an-Naḥw*. Edité et annoté par Hadi M. Kechrida. Stockholm: Almqvist & Wiksell, 1976.
- Ibn Hišām, *ʿAwḍaḥ* = Ġamāl ad-Dīn ʿAbū Muḥammad ʿAbdullāh ibn Yūsuf. *ʿAwḍaḥ al-Masālik ʿilā ʿAlfiyyat Ibn Mālik*. Ed. by Muḥammad Muḥyī ad-Dīn ʿAbd al-Ḥamīd. 3 vols. Bayrūt: Dār ʿIḡyāʾ at-Turāt al-ʿArabī, 1980.

- Ibn Hišām, *Qaṭr* = Ġamāl ad-Dīn 'Abū Muḥammad 'Abdullāh ibn Yūsuf. *Qaṭr an-Nadā wa Ball aṣ-Ṣadā*. Ed. by Muḥammad Muḥyi ad-Dīn 'Abd al-Ḥamīd. Bayrūt: al-Maktaba al-'Aṣriyya, 1988.
- Ibn Hišām, *Šuḍūr* = Ġamāl ad-Dīn 'Abū Muḥammad 'Abdullāh ibn Yūsuf. *Šuḍūr aḍ-Ḍahab*. Ed. by Muḥammad 'Abd al-Mun'im Ḥafāḡi & 'Abd al-'Azīz Šaraf. Bayrūt: Dār al-Kitāb al-Lubnānī, 1999.
- Ibn Mālik, *Tashīl* = Ġamāl ad-Dīn Muḥammad ibn 'Abdullāh ibn 'Abdullāh al-'Andalusī. *Šarḥ at-Tashīl*. 3 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 2001.
- Ibn an-Nadīm, *Fihrist* = 'Abū al-Faraḡ Muḥammad ibn 'Abī Ya'qūb 'Ishāq al-Warrāq. *Kitāb al-Fihrist*. Ed. by Riḍā Taḡaddud ibn 'Alī ibn Zayn al-'Ābidīn al-Ḥā'irī al-Mazdarānī. Bayrūt: Dār al-Ma'rifa, 1978.
- Ibn Qutayba, *Adab* = 'Abū Muḥammad 'Abdullāh ibn Muslim, *Adab al-Kātib*. Ed. by 'Alī Fā'ūr. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1988.
- Ibn as-Sarrāḡ, *Uṣūl* = 'Abū Bakr ibn as-Sarī. *al-Uṣūl fī an-Naḥw*. Ed. by 'Abd al-Ḥusayn al-Fatī. Bayrūt: Mu'assasa ar-Risāla, 1985.
- Ibn 'Uṣfūr, *Muqarrib* = 'Abū Ḥasan 'Alī. *al-Muqarrib*. Ed. by 'Ādil 'Aḥmad 'Abd al-Mawḡūd & 'Alī Muḥammad Mu'awwaḍ. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1998.
- Ibn Ya'īs, *Šarḥ* = Muwaffaq ad-Dīn. *Šarḥ al-Mufaṣṣal*. 10 vols. Bayrūt: 'Ālam al-Kutub, n.d.
- al-Mubarrad, *Muqtaḍab* = 'Abū al-'Abbās Muḥammad ibn Yazīd. *al-Muqtaḍab*. Ed. by Muḥammad 'Abd al-Ḥāliq 'Uḍayma. 4 vols. Bayrūt, 'Ālam al-Kutub, n.d.
- Sibawayhi, *Kitāb* = 'Abū Bišr 'Uṯmān. *al-Kitāb*. (*Le livre de Sibawaihi*) Éd. par Hartwig Derenbourg. 2 vols. Paris, 1881-1889 [réimpr. Hildesheim, 1970]
- as-Suyūṭī, *Aṣbāḥ* = Ġalāl ad-Dīn 'Abū al-Faḍl 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Abī Bakr. *al-Aṣbāḥ wa an-Naḏā'ir fī an-Naḥw*. 4 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1984.
- as-Suyūṭī, *Buḡya* = Ġalāl ad-Dīn 'Abū al-Faḍl 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Abī Bakr. *Buḡya al-Wu'āt fī Ṭabaqāt al-Luḡawīyyīn wa an-Nuḥāt*. Ed. by Muḥammad 'Abū al-Faḍl 'Ibrāhīm. 2 vols. Bayrūt: al-Maktaba al-'Aṣriyya, n.d.
- as-Suyūṭī, *Ham'* = Ġalāl ad-Dīn 'Abū al-Faḍl 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Abī Bakr. *Ham' al-Hawāmī' fī Šarḥ Ġam' al-Ġawāmī'*. Ed. by 'Aḥmad Šams ad-Dīn. 4 vols. Bayrūt: Dār al-Kutub al-'Ilmiyya, 1988.
- Ṭa'lab, *Maḡālis* = 'Abū l-'Abbās 'Aḥmad ibn Yaḥyā. *Maḡālis Ṭa'lab*. Ed. by 'Abd as-Salām Muḥammad Hārūn. 2 vols. Cairo: Dār al-Ma'ārif, n.d.
- az-Zaḡḡāḡī, *Ġumal* = 'Abū al-Qāsim 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Ishāq. *al-Ġumal*. Éd. par Mohammed Ben Cheneb. Paris: Klincksieck, 1957.
- az-Zaḡḡāḡī, *Idāḥ* = 'Abū al-Qāsim 'Abd ar-Raḥmān ibn 'Ishāq. *al-Idāḥ fī Ilal an-Naḥw*. Ed. by Māzin al-Mubārak. al-Qāhira: Dār an-Nafā'is, 1996.
- az-Zamaḡṣarī, *Mufaṣṣal* = 'Abū al-Qāsim Maḥmūd ibn 'Umar. *al-Mufaṣṣal fī 'Ilm al-'Arabiyya*. Bayrūt: Dār al-Ġīl, n.d.
- az-Zubaydī, *Ṭabaqāt* = 'Abū Bakr Muḥammad ibn al-Ḥasan. *Ṭabaqāt an-Naḥwiyyīn wa al-Luḡawīyyīn*. Ed. by Muḥammad 'Abū al-Faḍl 'Ibrāhīm. al-Qāhira: Dār al-Ma'ārif, n.d.

[二次資料]

- Baalbaki, R. (1981) "Arab grammatical Controversies and the extant Sources of the second and the third Centuries A. H." *Studia Arabica et Islamica. Festschrift for Iḥsān 'Abbās on his Sixtieth Birthday*, ed. by Wadād al-Qādī, 1-26. Beirut: American University of Beirut.
- Belguedj, M. S. (1973) "La démarche des premiers grammairiens arabes dans le domaine de la syntaxe." *Arabica* 20, pp. 168-85.
- Bernards, M. (1997) *Changing Traditions. Al-Mubarrad's Refutation of Sibawayh and the Subsequent Reception of the Kitāb*. Leiden: E. J. Brill.
- Carter, M.G. (1973) "Šarf et ḥilāf, Contribution à l'histoire de la grammaire arabe". *Arabica*

XX pp.292-304.

- Carter, M. G. (1981) *Arab Linguistics. An Introductory Classical Text with Translation and Notes*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Carter, M. G. (1990) "Arabic Grammar". Young, M. J. L., Latham, J. D. and Serjeant, R. B. eds. *Religion, Learning and Science in the Abbasid Period*. Cambridge University Press.
- Carter, M. G. (1999) "The Struggle for Authority: A re-examination of the Baṣran and Kūfan Debate". *Tradition and Innovation: Norm and Deviation in Arabic and Semitic Linguistics*. ed. by Lutz Edzard & Mohammed Nekroumi, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, pp. 55-70.
- Carter, M. G. (2000) "The Development of Arabic Linguistics after Sibawayhi: Baṣra, Kūfa and Baghdad". in: Sylvain Auroux et al., eds., *History of the Language Sciences*. Berlin, pp. 263-72.
- Carter, M. G. (2004) *Sibawayhi*. Oxford University Press.
- Fleisch, H. (1957) "Esquisse d'un historique de la grammaire arabe". *Arabica* IV pp.1-20.
- Fleisch, H. (1961) *Traité de philologie arabe*. I. *Préliminaires, phonétique, morphologie nominale*. Beirut: Imprimerie Catholique.
- Flügel, G. (1862) *Die grammatischen Schulen der Araber. Erste Abtheilung. Die Schulen von Basra und Kufa und die gemischte Schule*. Leipzig: F. A. Brockhaus.
- Levin, A. (1991) "What is Meant by al-maf'ūl al-muṭlaq?" Alan S. Kaye ed. *Semitic Studies: In Honor of Wolf Leslau on the Occasion of his eighty-fifth Birthday November 14th, 1991*. Volume II. Wiesbaden, pp. 919-926.
- Mosel, U. (1975) *Die syntaktische Terminologie bei Sibawayh*. Dissertation, Universität München.
- Owens, J. (1988) *The Foundations of Grammar. An Introduction to Medieval Arabic Grammatical Theory*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Owens, J. (1990) *Early Arabic Grammatical Theory. Heterogeneity and Standardization*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Owens, J. (1991) "Models for Interpreting the Development of Medieval Arabic Grammatical Theory". *Journal of the American Oriental Society*. Vol. 111. Number 2. pp. 225-238.
- Troupeau, G. (1962) "La grammaire à Baḡdād du IX^e au XIII^e siècle". *Arabica. Volume spécial. Publie à l'occasion du mille deux centième anniversaire de la fondation de Baḡdād*. pp. 397-405.
- Troupeau, G. (1976) *Lexique-Index du Kitāb de Sibawayhi*. Paris: Klincksieck.
- Versteegh, C. H. M. (1977) *Greek Elements in Arabic Linguistic Thinking*. Leiden: E. J. Brill.
- Versteegh, C. H. M. (1995) *The Explanation of Linguistic Causes. Az-Zaḡḡāḡi's Theory of Grammar*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Weil, G. (1913) *Die grammatischen Fragen der Basrer und Kufer*. Leiden: E. J. Brill.
- Yūsuf, M. I. (2000) *al-Ġuhūd al-Luḡawiyya li-Ibn as-Sarrāḡ. Dirāsa Taḥlīliyya*. al-Qāhira: Dār al-Kutub al-Miṣrī.
- 池田修 (1970) 「9世紀以前のアラビア語研究」『オリエント』11巻3/4号 pp. 121-160.
- 池田修 (1972) 「文法学派と都市」『イスラム化に関する共同研究報告5』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 173-209.
- 池田修 (1982) 「バスラ学派とクーファ学派」杉勇・前嶋信次他編『オリエント史講座 4 カリフの世界』学生社, pp. 124-140.
- 岡崎英樹 (2003) 「アラブ伝統文法における maf'ūl の下位範疇——イブン・アッサッラージの分類とそれ以降の変遷——」『関西アラブ・イスラム研究』3, pp. 15-32.
- 内記良一 (1968) 「クーファ派文法学の格概念について」『東京外国語大学論集』17, pp. 65-82